

凡例 **自** …自己評価 児、保〇〇%…肯定的評価の合計値 (±〇%)…昨年度との比較

1 山田小のめざす児童像 【教育目標】について

◎ **すすんで学び合う子ども** ～自主的・意欲的に学び合い、自ら考え判断して、実践できる子ども～

自 児84%(+10%)、保84%(+1%)

・児童に「主人公は自分」教員には「児童の参画意識の醸成」を目途に1年間取り組んだ結果、「主体としての自分」について意識が向上したと考えられる。

○ **思いやりのある子ども** ～自分を大切に、みんなを大切にできる子ども～

自 児86%(−1%)、保84%(−1%)

・フレンドタイムの計画運営など、児童の他者を意識した行動が、思いやり感覚の醸成に寄与していると考えられる。そこで、来年度も教育課程に「場・機会・対象」の確保を位置づける。

○ **たくましく生きる子ども** ～強い意志とじょうぶな体を持ち、すすんで行動できる子ども～

自 保92%(−3%)

・委員会活動による年間を通した運動機会の保証は、児童にも好評で、「アクティブタイム」には普段運動に関わらない児童にも良い機会を与えることができた。各運動旬間では、全校体制で運動に親しむ様子が確認できた。来年度も継続する。

本年度は、「**すすんで学び合う子ども**」を重点とし、問題解決にあたって主体的にねばり強く行動する「主人公は自分」とともに、他者とのコミュニケーションを図りながら自分の考えを深め、よりよく判断・表現できる子どもの育成をめざしてきた。また、自分の安心していられる居場所としての学級作りを引き続き進め、「児童の参画意識を育む」効果的な指導について模索させた。教職員は校内研究等でも取り組み、自身の授業力向上へ、日々努力していた。

2 中期的目標(3～5年を目安に)と今年度の取組、方策について～めざす児童像を実現するために～

(1) **確かな学力を育む教育の推進のために…分かり易い授業づくりを目指して**

自 児 90%(−3%)、保81%(−9%) わからない:保18%(+7%)

・各教科において、問題解決的な学習を中心に児童の主体的・対話的で深い学びの実現を目指す指導の工夫に取り組んできた。ペアや集団同志による話し合いをもとに全体へ共有し思考を高めていく授業づくりは定着してきた。来年度はその手法に一層磨きをかける授業力向上を目指す。

・算数科において、3年から取り組んだ習熟度に応じた少人数指導は落ち着いた学習への取組となった。

・発達段階に応じた宿題等の学習課題の提供、家庭学習の習慣化については「かける時間」の概念は周知できたが、「やり方」「内容」については不十分。来年度早い時期から取り組んでいく

・朝学習の習慣化、パワーアップの活用により、基礎学力の定着を図ることをめざした。4～6学年の「八王子っ子ミニマム」の活用によって、義務教育9年間での基礎学力の向上、定着に取り組む。

・豊かな自然環境を生かした指導や、外部人材の活用については以前の状況に戻りつつあるが、まだまだ改善の余地ありと考える。

・年3回以上の授業公開、学期1回の授業研究でを互いに見合う中で、自らの授業力向上の課題をつかみ、日々授業改善に取り組んできた。来年度も取り組みを継続していく。

(2) 豊かな人間性を育む人権尊重教育の推進のために・・・自分や他人の大切さを認め行動することができる 児86%(-1%)、保84%(-1%)

学校は保護者、地域と連携しながら教育活動を行っている。 保87%(-3%)

- ・すべての教育活動を通じて、教育活動全体を通して、思いやりの心や豊かな心を育てるため道徳教育の充実を図ってきた。道徳授業地区公開講座では、保護者の参観、授業後の講演会などを機会に道徳授業への理解を進めることができた。また、小中の児童、生徒による挨拶運動が小中一貫教育の取組の一つとして実施できたことは成果である。
- ・全教職員の共通理解のもと学校のきまりの指導の徹底、小中一貫教育による9年間を見通した生活指導の実施、4校共通のスタンダードの教室掲示など児童への定着を図る。また、「地域の中で育つ子供」を達成するには地域力の助けが必要であるが、「放課後」の過ごし方について、地域との協働を来年度も充実させる。
- ・児童への安全確保の徹底、生活当番による校舎内外の見回り、安全点検の確実な実施、交通安全指導の充実、不審者対応の指導、学校安全ボランティアとの連携、校外での児童の生活状況の把握、情報セキュリティの指導を年間計画に位置付け、実施できた。ゲストティーチャーの活用も含め継続する。児童理解を深めることで課題を早期に発見し、全教職員で共通理解と指導を進める。
- ・毎週木曜日の生活指導夕会での共通理解、生活指導全体会での情報共有は欠かさず実施できた。教職員が気付いた児童の成長を交流する機会も設け、全児童に全職員が寄り添う学校作りの一助となった。食物等のアレルギー児童への対応の共通理解、エピソードシミュレーション研修会も実施できたが、緩めることなく真摯に実践していく。
- ・計測の時間を活用し、養護教諭が児童に身近な話題(視力低下や、朝食の大切さ)について、児童の実態をもとに具体的な指導を重ねた。「登校 60 分前起床」の推奨、「八王子家庭教育8か条」のよりよい生活習慣の確立への啓発など引き続き取り組む。

(3) たくましく生きるための心と体の育成のために・・・体力向上の取組 保92%(-3%)

- ・日常的に外遊びを励行し、児童の実態と発達段階を踏まえて体育科の授業を改善してきた。冬場の(長袖、長ズボンの)体育着の着用は、運動嫌いの児童を減少させるに役立った。
- ・委員会活動中心のアクティブタイム、持久走・なわとび旬間の実施、運動機会の保証によってわずかでも児童の体力向上に繋がった。
- ・体育科・家庭科・特別活動による健康教育、栄養士との連携による食育(高学年による献立作り、バランスのとれた食事・・・リクエスト給食、おはし名人になろう)活動に継続して取り組む。
- ・薬剤師と連携した薬物乱用防止教室の実施は外部講師(薬剤師)のタイムリーな授業は大変児童の心に響き有効であった。がん教育にも引き続き取り組んでいく。
- ・自分の身は自分で守る指導を通して、児童の危険に対する意識を高めるため、避難訓練の時刻、内容を固定化せず、児童が考える場面を想定の中に組み込み実施する。後半は「予告なし」の訓練を行い、どんな時でも自らを守る行動を最優先させる訓練とする。

(4) 個に応じた支援の工夫と特別支援教育の充実させるために

保48%(-15%)わからない:41%(+13%)

- ・「特別支援教育」の理解が進んでいない。特別支援コーディネーターを中心に、学校サポーターと緊密な連携と支援、第三小の巡回指導教員との連携、特別支援教室専門員による調整、臨床発達心理士の巡回指導等学校で行われている活動が、正しく理解されていない。理解教育の更なる推進と特別支援教育への正しい理解が浸透するよう外部諸機関(・医療機関・教育センター・スクールカウンセラーとの連

携、特別支援学校との副籍交流の充実)と連携した活動を模索する。

・教育のユニバーサルデザイン化に取り組み、個に応じた支援の工夫(板書や教材提示、ワークシート等)を行う。

(5) いじめを防ぐ取組の充実のために 児82%(−1%)、保72%(−5%)

・週1回の「学校いじめ対策委員会」の確保、活用し、決して個人で当たろうとせず、組織を活かした支援体制を確立する。不登校ゼロをめざす支援体制の充実、来年度は教室外の指導の共通理解も浸透させていく。

・「SOSを出せる授業」を実施、相談できる大人の確実な確保。(相談する大人がいない児童の追跡、聞き取りを担当が実施)相談できる人の確保を必ず行う。

・不登校傾向にある児童については「外部とのかかわりを作り、切らないようにさせることを第一義とする」ために「月1回放課後の学校で遊ぼう」開催、外部機関との定期的で綿密な情報交換を通し支えていく。

(6) 保護者・地域と連携した教育活動の充実させるために 保87%(−3%)

・地域運営学校として学校運営協議会を充実させ、地域とともに防災体験教室、放課後子供教室、サタデースクール等を実施した。学運協主催の地域行事では多くの地域の方々の参加があり、この行事が地域に根付いていることを実感した。これからも地域の中の学校として活動について見直していく。

・保護者ボランティアの活動は、コーディネーターにも支えられ順調に継続している。地域の方と触れ合う、体験的な学習活動を模索し、協力を得る年度にしたい

・学校のおみやげや特色等の情報を学校だよりやホームページ等で発信し、保護者・地域の方々とのパートナーシップを醸成する活動を学期に1回実施したい。

(7) 特別活動を充実させるために

・集団の中で、人とかかわりを重視した学級活動や学校行事を行う。儀式的行事では、関わる学年を参加させ、自ら校風を作り上げていく気概を持たせることができた。参画意識の向上にも引き続き取り組む。

・異年齢集団での活動(スマイルタイム)だけでなく学習のなかでも、児童自らに相手意識をもたせ活動することができ、同級生との協力・信頼だけでなく社会性や集団への帰属意識を育てることができた。

・学校行事と代表委員会との十分な連携、ユニセフ募金・挨拶運動・一年生を迎える会・六年生を送る会における代表委員会のリーダーシップの発揮がみられ、「自分たちの山田小」意識のスタートとなった。

(8) 校内研究で各人の授業力向上、自らが新たなことに挑戦し、自己の研鑽に努め、教育課題の解決に意欲的に取り組む教師集団をめざすをさせるために

・校内研究を推進し、各人の目標を①授業力向上②脱・一斉授業③学習ツールの開発とし、1年間自身の授業の中で取り組めたことは、教員の自己評価を高め、日々の授業改善に取り組めた。

・6年間を見通した、一人一台端末の授業での活用を目指すとともに、外部講師の指導も含め情報活用能力の育成、情報モラルを身に付けさせることができた。

・教員自身のキャリアプランに応じた研究・研修の取組を通して、指導力の向上を目途に小教研・各種研修会へ、積極的に参加、公開授業も引き受ける教員も出た。

(9) 小中一貫教育の推進させるために 児65%、保83%(+8%)

・義務教育9年間を見通した児童・生徒像を七中学区4校が統一して取り組んだことは大きな前進である。さらに今年度は一層の「人的交流」の推進を念頭に、小中合同の挨拶運動、合唱コンクール審査員、学校保健委員会への参加、年3回の小中一貫教育の日のテーマごとに取り組む充実など具体的な実践が行われた。より一層の4校共通の学習面・生活指導面の指導の徹底が共通認識となるとよい。

・児童会、生徒会の交流(「はちおうじっ子サミット」への参加)

・青少対第七地区・横山地区、サタデースクール、放課後子ども教室運営委員会等との連携 など